

# 小学校高学年担任の外国語活動における現状と課題

—教師の困難と支援を中心にして—

所属校：江戸川区立第五葛西小学校

氏名：丸山 順子

派遣先：玉川大学教職大学院

キーワード：外国語活動・授業者の実態・授業者への支援・教科等との共通点

## I 研究の目的

来年度から外国語活動が本格実施になる。これまでの研究では「児童の意欲を高める内容」「コミュニケーション能力を育てるため内容」や、カリキュラム、評価等をテーマとし、研究授業が多くの学校で行われてきた。しかし、実際に授業を行う教員の実態については多く述べられてこなかった。

現場の教員の多くは外国語活動の授業に不安を感じ、自信をもつことができていない。本研究では、小学校教員と小学5年生の英語能力と外国語活動に対する意識調査を行った上で、小学校教員が外国語活動の授業でどのような展開をするかを観察し、以下のことを明らかにする。

- ① 授業者（5年生担任）の英語能力テストと外国語活動指導に対する思いや意欲についてインタビューを行い、授業者の実態を明らかにする。
- ② 授業の対象となる5年生児童に単語力テストと外国語活動に対する思いや意欲についてアンケートをし、児童の実態を明らかにする。
- ③ 授業観察を通して授業者の授業の中での困難やよさを明らかにする。
- ④ 授業者の困難を軽減するためにどのような支援が有効であったかを明らかにする。

## II 研究の方法

### 1 授業者の実態

平成22年7月26日、5年生担任3名を対象に、日本英語検定協会英語検定3級の問題を解いてもらった。また、外国語活動に対する問題点、自分自身の課題についてインタビューを行った。

### 2 児童の実態

平成22年9月3日、5年生3クラス105名を対象に児童の英語能力（内容理解、英単語の理解）調査、外国語活動に対する意識調査を行った。

### 3 授業観察

平成21年9月24日から11月12日の間に5年生3クラスにおいて各クラス6時間の授業を観察した。授

業の様子を記録するために、授業者の行動記録とビデオ撮影を行った。授業の最後に児童に振り返りカードを書かせた。「英語表現の慣れ」、「コミュニケーション」に対する意欲を4段階の自己評価してもらい、授業で楽しかったことや発見したことなどを記述してもらった。

### 4 教師に対する支援

授業前までに授業者と指導案の検討をし、ねらいや注意点を確認した。授業を観察した後、その日のうちに授業者と個別に協議を行った。授業を振り返り、自評してもらい、授業のねらいと自身のめあてに対しての達成具合を確かめた。課題を確認し、課題のために何をすべきかを話し合い、次時のめあてを明らかにした。

## III 研究の結果

### 1 授業者の実態

A教諭は経験の不足から、外国語活動の授業展開に見通しがもてず不安に陥っていた。B教諭は、自分が英語を正しく話せるよう努力し、児童にもそれを求めるための指導法を迷っていた。C教諭は自分自身が、英語が苦手と話せないことを心配に思っていた。また3人の授業者は口々に、「外国語活動が必修になるのは負担である。」ということ saying 言っていた。

### 2 児童の実態

児童は、日常生活の中で外来語として使っている英単語や、数の数え方に慣れている。児童の外国語活動に対する意欲は高く、授業を楽しみにしている。クラス間の差は見られない。

### 3 授業観察

授業観察から授業者の困難やよさが明らかになった。

- [1] 教師が無理に英語をたくさん使おうとしていた。
- [2] 授業の展開に見通しがなく、それぞれの活動のねらいが意識されていなかった。
- [3] 担任だからこそその活動、児童の支援を行っていた。

#### 4 授業者への支援

- 〔支援1〕 教師が話す英語を限定した。
- 〔支援2-1〕 授業の流れを毎回同じにした。
- 〔支援2-2〕 グループ活動時間を、児童への個別の指導、支援の時間とした。
- 〔支援2-3〕 児童の発話量を増やす具体的な方策を与えた。
- 〔支援2-4〕 最後まで活動のねらいを忘れないように意識づけた。
- 〔支援3〕 担任が積極的に児童をほめるようにした。

#### 5 支援に対する授業者の変化

- (1) 3人の教師に共通の変化
  - 授業の流れが定着し教師も児童も見通しをもって授業に臨めた。〔支援2-1、2-3、3〕  
Warming up, Review, Activity, Closingのそれぞれの活動でのねらいを意識し、教材研究をすることができた。
  - クラスルームイングリッシュの共有ができた。  
〔支援1、2-4〕
  - 外国語活動のねらいを意識した活動ができるようになった。〔支援2-4〕
  - ねらいとなる表現の練習時間の確保ができた。  
〔支援2-3、2-2〕
  - 外国語活動についてわからないことがあると他の教員に相談するようになった。
- (2) それぞれの教師特有の変化

A教諭は、C教諭の授業を参観して活動の流れや方法を参考にした。ねらいは何か、この活動で児童がどう動くのか、どのくらい時間がかかるのかなどの見通しをもつことで、児童とのやり取りがねらいに沿ったものになった。授業パターンに慣れると余裕が生まれ、児童をよく見て、自信をもたせるような声かけができるようになった。

B教諭は、外国語活動と他教科との授業の性質の違いを認識した。「英語を教える」という意識が強かったことと、「英語」という言葉を扱う活動では一度発話したからといって児童は言葉を覚えたり、言葉を使いこなして活動できたりするものではないことに気付いた。学習指導要領の外国語活動の目標を再確認した。

C教諭は英語が苦手であるが、そのことを払拭したかのように児童の実態を見ながら児童を楽しませ、モチベーションをもたせる指導ができるようになった。外国語活動が特別な活動ではないことに気付き、これまでの経験を生かした児童への指導、支援ができるようになった。自分のやりやすい方法を見つけ（ポスタ

一、授業日記の作成)、授業展開に見通しがもてると、授業中に次々にアイデアが生まれてくるのだそうだ。児童が自信をもって発話できる内容や復習に時間をかけ、児童の発話量を多くした。他教科、活動への応用をすることが楽しんでいた。全て教師が英語の見本になるのではなく、CDを使ったり、児童をうまく動かしたりして授業を組み立てることができるようになった。

#### IV 考察

授業者は外国語活動に対して漠然とした授業のイメージしかなく、何をどうしていいのかわからない状態だったが、授業者それぞれの実態に合った支援やアドバイスをすることで、2ヶ月の間に授業者それぞれに変化が見られた。

授業者には、英語能力や経験年数によって支援を変えるよりも、外国語活動指導者の初心者としての指導、支援が必要であると考えられる。「外国語活動指導初心者への支援」とは何かを考えた。

##### 1 外国語活動と他教科の指導の共通点を明らかにした支援

- ① 目標を明確にした活動にすること
- ② 授業展開の構成、それぞれの活動内でのパターンを作ること
- ③ 児童を見取ること

##### 2 「外国語」(新しい言葉)を扱う学習の注意点を明らかにした支援

- ① 「教え込む」ことからの脱却が必要である。
- ② 評価の仕方を工夫する。

現在授業者の多くは自分が外国語活動の学習者として経験をできていない。しかし今回の研究で授業者のスタートラインを明らかにし、今抱えている困難を減らす支援をしたことで、約2ヶ月の間に授業者の外国語活動に対するモチベーションを高めることができた。

外国語活動はその他にも、ALT、NT (Native Teacher) や地域のボランティアとのチームティーチングで行う授業での担任の授業の役割、カリキュラム作り、年間指導計画作成や教材準備などといった課題が山積している。しかし、まずは授業者の意欲を高めるための支援が必要であり、早急に進めていかなければならないだろう。